

西安寺跡第11次  
発掘調査報告書

2023. 3

王寺町

西 安 寺 跡 第 11 次  
発掘調査報告書

## 序

王寺町は、奈良県の西の玄関口としていちはやく鉄道が開通し、王寺駅を中心とし交通の町として発展してきました。大和川、葛下川や明神山などの水と緑に恵まれた自然豊かな町です。

奈良県指定史跡の西安寺跡は、飛鳥時代建立の古代寺院跡で、聖徳太子建立の46カ寺の一つとも伝えられています。平成26年度から開始した舟戸神社周辺での発掘調査では、塔・金堂をはじめとした遺構がよく残っていることがわかり、今回の第11次発掘調査でひと区切りを迎えることとなりました。

今後は、2019年度に認定されました「王寺町文化財保存活用地域計画」に基づいて調査、史跡整備を行い、西安寺跡を皆様にご覧いただけるよう計画しております。

最後になりましたが、調査の実施にご協力くださいました土地所有者様をはじめ、文化庁、奈良県文化財保存課など、関係各所の皆様に御礼申上げます。

2023年3月

王寺町長

平井 康之

## 例　　言

1. 本書は、奈良県北葛城郡王寺町舟戸2丁目4189番地内において実施した西安寺跡第11次発掘調査について報告したものである。西安寺跡は『奈良県遺跡地図』(奈良県教育委員会、2010年改訂版)10B-0001として登載されている。

2. 調査は王寺町が実施した。調査体制は以下のとおりである。

調査主体	王寺町　町長	平井康之
	地域整備部参事	前田日出高
	同地域交流課長	片岡篤（2022.4～）
	同文化資源活用係長	岡島永昌
		同主任　梅野麻衣子
調査担当者	同会計年度任用職員	櫻井恵
	同会計年度任用職員	福井彩乃
調査補助員	同会計年度任用職員	岡島颶斗（～2022.11）
遺物整理	同会計年度任用職員	青木佐和（～2022.3）
	同会計年度任用職員	三宅裕子（2022.4～）
発掘作業	株式会社島田組	
写真測量	株式会社アクセス	
調査協力・助言	宗教法人舟戸神社、文化庁、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所、大西貴夫、岡田雅彦、齋藤希、芝康次郎、清水昭博、中野咲、竹内亮、廣岡孝信、光石鳴巳、本村充保（五十音順、敬称略）	
	西安寺跡史跡整備活用委員会（2017.2.17設置）	
	前園実知雄、大脇潔、山岸常人、東野治之、仲隆裕、光石鳴巳（～2022.3）、鈴木裕明（2022.4～）、中川忠儀（敬称略）	

3. 本書で使用している座標数値は世界測地系、水準値はT.P.値（東京湾平均海面値）に基づくものである。

4. 土層の色、遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖23版』に拠った。

5. 図2は国土地理院発行の1/50,000地形図大阪東南部（昭和59年7月30日発行）および『奈良県遺跡地図』（2010年改訂版）、図3・図13は王寺町下水道台帳の地形図（1/500）をもとに作成した。

6. 出土遺物をはじめ調査にかかる記録はすべて王寺町において保管している。

7. 遺物の撮影は岡島永昌、写真図版の作成は福井彩乃、執筆は福井・櫻井恵が行い、編集は櫻井が行った。

## 本文目次

第1章 はじめに	1
第2章 調査の内容	4
第3章 まとめ	16

## 挿図目次

図1 王寺町の位置	図8 III層出土遺物実測図3 (1/6)
第1章 はじめに	図9 III層出土遺物実測図4 (1/6)
図2 周辺の遺跡 (1/50,000)	図10 IV層出土遺物実測図 (1/4)
図3 調査位置図 (1/1,000)	第3章 まとめ
第2章 調査の内容	図11 金堂検出遺構平面図 (1/200)
図4 検出遺構平面図・土層断面図 (1/50)	図12 基壇外装の改修過程模式図
図5 I・II層出土遺物実測図 (1/4・1/6)	図13 伽藍想定図 (1/500)
図6 III層出土遺物実測図1 (1/4)	
図7 III層出土遺物実測図2 (1/4)	

## 写真目次

写真図版1 調査写真	写真図版4 調査写真
調査前 (北東から)	1 トレンチ 断ち割り 南東角土層断面 (北東から)
調査地遠景 (北から)	1 トレンチ 断ち割り 南西角土層断面 (北西から)
金堂北面遺構検出状況 (北から)	1 トレンチ 断ち割り 外装版築下の瓦を含む整地 土 (北から)
写真図版2 調査写真	
1 トレンチ 金堂基壇北面 (北から)	写真図版5 I・II層 出土遺物
1 トレンチ 東壁土層断面 (西から)	写真図版6 III層 出土遺物
1 トレンチ 西壁土層断面 (北東から)	
写真図版3 調査写真	写真図版7 III層 出土遺物
1 トレンチ 西壁 基壇外周土層断面 (北東から)	
2 トレンチ 南東隅 外装版築土層断面 (北西から)	写真図版8 III層 出土遺物
2 トレンチ 土坡検出状況 (南西から)	
	写真図版9 III・IV層 出土遺物
	写真図版10 IV層 出土遺物

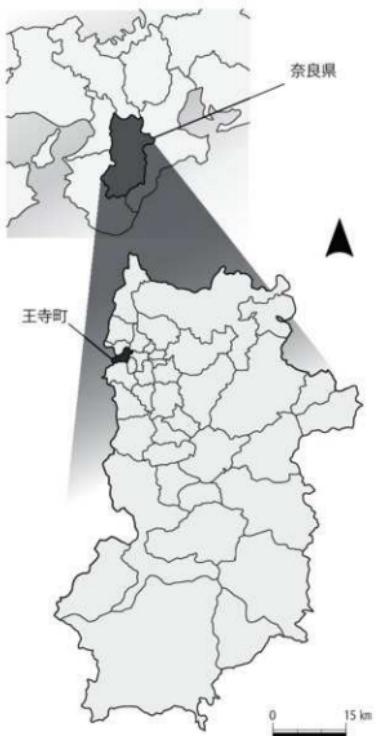


図1 王寺町の位置

# 第1章 はじめに

## 1 位置と環境

**地理的環境** 西安寺跡が所在する王寺町は、奈良県の北西部にあり、北を西流する大和川の左岸に位置する。東に河合町、東南に上牧町、南に香芝市、北は大和川を挟んで三郷町、斑鳩町と隣接しており、西は亀の瀬と呼ばれる渓谷を抜けると大阪府柏原市であり、大阪府と奈良県の府県境になっている。

王寺町は地形的に、河合町から延びる馬見丘陵の北端で砂礫・粘土の大坂層群からなる東部丘陵、町域を北流する葛下川と、北を西流する大和川の沿岸で沖積層からなる東部低地、二上山火山群の北への延長である西部高地、東部低地と西部高地の漸移地帯で大阪層群からなる西部丘陵に分けられ、西安寺跡は東部丘陵の北端に当たる舟戸山の西麓、舟戸山の谷筋が広がる傾斜地に立地している。現在では舟戸地区の氏神である舟戸神社が鎮座しており、その境内に西安寺跡の塔堂の遺構がある。舟戸神社境内を中心とする東西約110m、南北約120mを周囲の埋蔵文化財包蔵地としている。

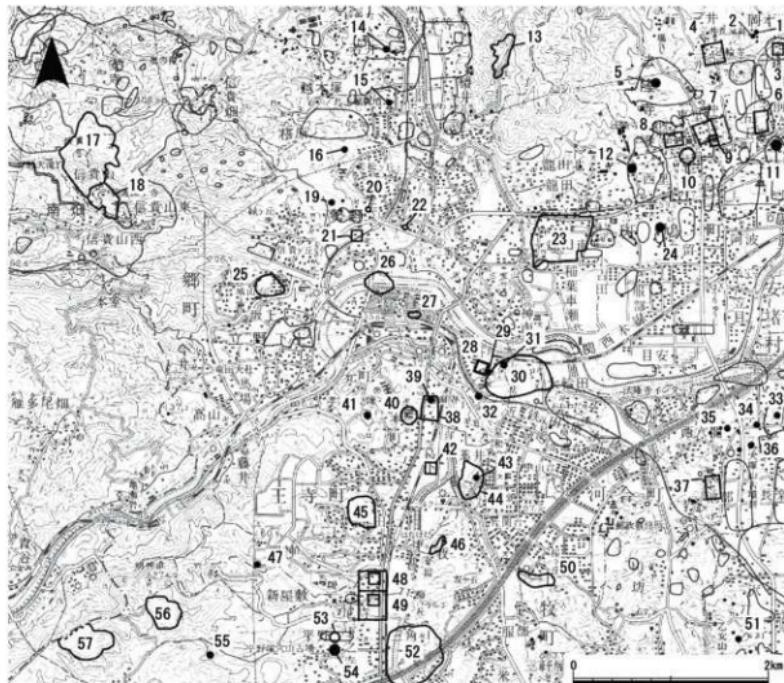
舟戸神社境内は周囲の土地から1~2m程度高く、最高所は標高45.5mである。境内の東側は舟戸山の斜面を利用した耕作地が広がっており、隣接地は水田が営まれる。境内の西端には南北方向に流れる水路があり、この水路を境にした西側には住宅地が広がっている。昭和40年代に宅地開発されるまでは水田が営まれていた。南側には標高67.5mの東部丘陵を造成して設置した旧王寺北小学校があり、本来西安寺の南方には山裾が迫っていた。北側には舟戸新池があり、さらに北方には大和川が流れている。舟戸新池は天理大学附属天理図書館に所蔵されている元文3年(1738)「御尋ニ付申上覚書」によると、享保7年(1722)に築造され、字名から「西安寺池」と呼称されていた。

舟戸神社は天児屋根命と久那戸大神を祭神としており、久那戸大神は道祖神と同じく道路や旅人を守る神である。神社の創立は不詳だが、境内の手水鉢に嘉永元年(1848)、石灯籠に嘉永3年(1850)の銘があることから、江戸時代には信仰があった。

**歴史的環境** 大和川は古来より難波津と飛鳥を結ぶ交通路として重要な役割を担っていた。『日本書紀』推古天皇16年(608)に隋使の裴世清が難波津から海石櫻市を経て飛鳥へと赴いたことが記されており、その経路に大和川が利用されたと考えられている。西安寺跡周辺の大和川が関連する遺跡として、舟戸・西岡遺跡(30)が挙げられる。舟戸山の山頂一帯が遺物散布地となっており、発掘調査では弥生時代後期の住居跡や古代の柱立柱建物跡を検出している。奈良盆地を見渡せる眺望のよい丘陵上で、眼下に大和川が流れていることから、弥生時代後期の高地性集落で、大和川の交通を監視する役割を担っていたと考えられている。

西安寺(28)が創建された飛鳥時代には、『日本書紀』推古天皇9年(601)の聖徳太子による斑鳩宮の造営を契機に多くの寺院が建立された。聖徳太子が住む斑鳩では7世紀初頭に法隆寺若草伽藍(10)、7世紀前半に中宮寺(6)、法起寺(3)、法輪寺(4)、7世紀後半に法隆寺西院伽藍(8)、大和川沿岸では7世紀前半に平隆寺(21)、7世紀半ばから後半に長林寺(37)、葛下川沿岸では7世紀前半に片岡王寺(40)、尼寺南麻寺(49)、7世紀半ばから後半に尼寺北麻寺(48)が創建されている。これらの寺院はいずれも大和川の水路とともに陸路とも密接に関わっており、平隆寺は河内と大和を結ぶ龍田道沿いに、法隆寺は龍田道と筋道(太子道)の結節点に、片岡王寺、尼寺北麻寺、同南麻寺は斑鳩と当麻方面を結ぶ当麻街道沿いにあり、西安寺はその当麻街道と大和川が交差する位置にある。また当麻街道は、現在では聖徳太子の御遺体を磯長墓まで運んだ「聖徳太子葬送の道」として、聖徳太子信仰の一つとなっている。

西安寺跡の東側には西安寺の所用瓦を供給していたとされる西安寺瓦窯(29)がある。現在では住宅地になつておらず確認できないが、瓦窯跡の南側にある瓦谷池で行った護岸工事で瓦が出土した話が残っており、また池の周辺で行った工事立会では瓦片の出土があった。



- 1 五環 1号墳 2 三井瓦窯跡 3 法起寺境内 4 法輪寺旧境内遺跡 5 仏塚古墳 6 中宮寺跡 7 遠見宮跡 8 法隆寺西院 9 法隆寺東院  
 10 若草伽藍跡 11 胶塚古墳 12 藤ノ木古墳 13 椿井城跡 14 西宮古墳 15 烏土塚古墳 16 今池瓦窯 17 信貴山城跡 18 信貴山朝護孫子寺  
 19 佐ノ畠内瓦窯跡 20 上ノ御所瓦窯 21 平塙寺跡 22 効勢野茶臼山古墳 23 龍田城跡 24 斑塙大塚古墳 25 立野城 26 久度遺跡  
 27 久度南遺跡 28 西安寺跡 29 西安寺瓦窯 30 舟戸・西岡遺跡 31 古墳状堆积 32 岩才池北古墳 33 城山古墳 34 丸山古墳  
 35 高山塙1号墳 36 川合大塚山古墳 37 長林寺跡 38 遠磨寺跡 39 遠磨寺古墳群 40 片岡王寺跡 41 馬ヶ脊城跡 42 寺院推定地  
 43 萩井瀬ノ北遺跡 44 香爐・萩井遺跡 45 岛田城跡 46 片岡城跡 47 岛田古墳 48 尼寺北摩寺 49 尼寺南摩寺 50 下牧瓦窯跡  
 51 池上古墳 52 木辻城跡 53 平野瓦窯跡群 54 平野古墳群 55 今泉古墳 56 送迎山城跡 57 七郷山城跡

図2 周辺の遺跡 (1/50,000)

## 2 調査の契機と経過

**既往の研究** 舟戸神社の境内が西安寺跡に当たることは、昭和初期に保井芳太郎氏、石田茂作氏によって周知された。保井氏は『大和上代寺院志』の中で、文献にみられる西安寺（一名久度寺）は「西安寺」の字名が残る舟戸神社の境内に主要建造物があると考え、採集された飛鳥時代から鎌倉時代の軒丸瓦、軒平瓦などを報告している。石田氏は、塔心礎と思われる径1間以上の礎石面の中央に径2尺あまりの円形穴を穿った石が、狛犬の東3間くらいにあったことを地元の好事家である正光寺の住職から聞き取り、『飛鳥時代寺院址の研究』の中で、拝殿の北東に塔、本殿の南側の石片の散布する位置に金堂があると推定し、さらに拝殿の西北にある東西方向に延びる帶状の高まりにも注目した。そして、舟戸神社周辺の地形と神社の西方約30mの田地に「門脇」「馬場脇」の俗称が残っていることから、西安寺は西面する法隆寺式伽藍配置の寺院と考えた。

創建時の記録は残っておらず、西安寺の寺名がはじめて文献に現れるのは『続日本後紀』の天長10年(833)

条で、西安寺は大和国広瀬（瀬）郡にあり、俗号久度と記されている。また文永・弘安期（1264～1288）に行賄が著わした『簡要類聚抄』によって、鎌倉時代には西安寺が興福寺一乘院の末寺であったことがわかり、貞和3年（1347）の史料では興福寺造営料を納めた記録が残っている。

創建氏族に関して、平林章仁氏が『新訂王寺町史』で見解を示している。仁安3年（1168）の「大和国大原吉宗田地売券」では「広瀬郡久戸十条寺岡一里卅五坪西安寺」に当たる田地四段は大原吉宗先祖相伝の所領であると記されている。また、西安寺西方の王寺町久度には、西安寺の別名と同じ久度神社（延喜式内社）があり、祭神の一つに久度神がある。久度神は竈の後方の煙出し部分を神格化させたカマド神で、渡来系氏族が奉斎する神であり、久度一帯には渡来系氏族が居住していたと考えられている。以上から、平林氏は西安寺が渡来系氏族である大原史氏によって創建されたと考えている。

塔・金堂の遺構が残る舟戸神社境内は、平成31年2月22日に西安寺跡として奈良県指定史跡に指定された。

**既往の調査** これまでに10次の発掘調査が行われている。第1次調査は昭和59年（1984）度に舟戸神社の西側の集合住宅建設に伴って行われた奈良県立橿原考古学研究所による調査である。この調査で検出した南北方向の溝は、西安寺の西端の築地の構と考えられている。その後の西安寺跡周辺での発掘調査は、王寺町教育委員会・王寺町で行っている。第2次調査は平成26年（2014）度に包蔵地の北西部に隣接する位置で計画された宅地開発に対応したものである。西安寺にかかる遺構、遺物は出土せず、寺域から外れた場所と考えられた。同年度、範囲確認調査の第3次調査を初めて舟戸神社境内で行い、保井氏、石田氏が報告する塔跡推定地で心礎抜取穴、礎石を検出し、塔跡を確認した。翌年度の第4次調査では、塔跡の北側で金堂と推定できる版築で構築された基壇と礎石を確認した。平成28年（2016）度には舟戸神社の北西で個人住宅建設に伴い第5次調査を行っている。舟戸神社から地盤が一段下がるもの、西安寺の関連遺構と考えられる古代の整地土、地山上では柱穴等を検出した。また、範囲確認調査として行った第6次調査では、神社西端と西側に隣接する畠地を調査し、関連遺構を検出している。

第3～6次調査によって、舟戸神社とその周辺には西安寺の遺構が良好な状態で残ることが確認できた。そこで、王寺町では西安寺跡を貴重な文化財として保存・活用していく方針を定め、平成28年（2016）度に西安寺跡史跡整備活用委員会を組織し、発掘調査を進めていくこととした。平成29年（2017）度の第7次調査では、改めて塔跡の調査を行い、第3次調査の成果と合わせて、心礎の抜取穴、四天柱の礎石を含む礎石抜取穴5基、側柱の礎石3個、乱石積基壇外装を検出し、塔の初層は一辺が6.75mと復元でき、心礎が地上式であることから7世紀末から8世紀初頭を創建時期とした。平成30年（2018）度の第8次調査では、第4次調査で検出した基壇建物の調査を行った。南、北、東の三面で乱石積基壇外装、基壇上では2個の礎石、5基の礎石抜取跡を検出し、東西方向に桁行5間、南北方向に梁行4間の建物が復元でき、東西方向に棟の通る金堂跡と確定した。その結果、塔、金堂が直線上に並ぶことから、西安寺跡は四天王寺式伽藍配置の寺院と考えられるようになった。また、この調査で出土した素弁蓮華文軒丸瓦と法隆寺若草伽藍出土瓦の同范が確認され、從来、指摘されるように西安寺の創建が7世紀前半に遡ることが裏付けられている。

令和元年（2019）度の第9次調査では、神社の東側の水田で東回廊とその雨落溝、北側の水田で版築状の整地が広い範囲で行われていることを確認した。その整地土上面では、一列に並ぶ木製燈籠の柱根と柱穴を検出している。そして、これまでに検出した遺構の配置から西安寺の伽藍中軸線が確定した。それにより、金堂基壇の規模が復元でき、東回廊の外側雨落溝を伽藍中軸線で折り返して推定した西回廊外側雨落溝の位置が舟戸神社の西端の水路と一致することが判明した。令和2年（2020）度の第10次調査では、伽藍の向きを確認するため、これまで検出していない西回廊、南回廊と門の遺構の確認を行った。西回廊の推定地は削平を受け遺構は確認することはできなかったが、塔の南側では基壇を検出し、周辺の調査成果から南回廊と考えられた。両調査区における門の遺構は確認できていないため、伽藍の向きを特定することはできない。

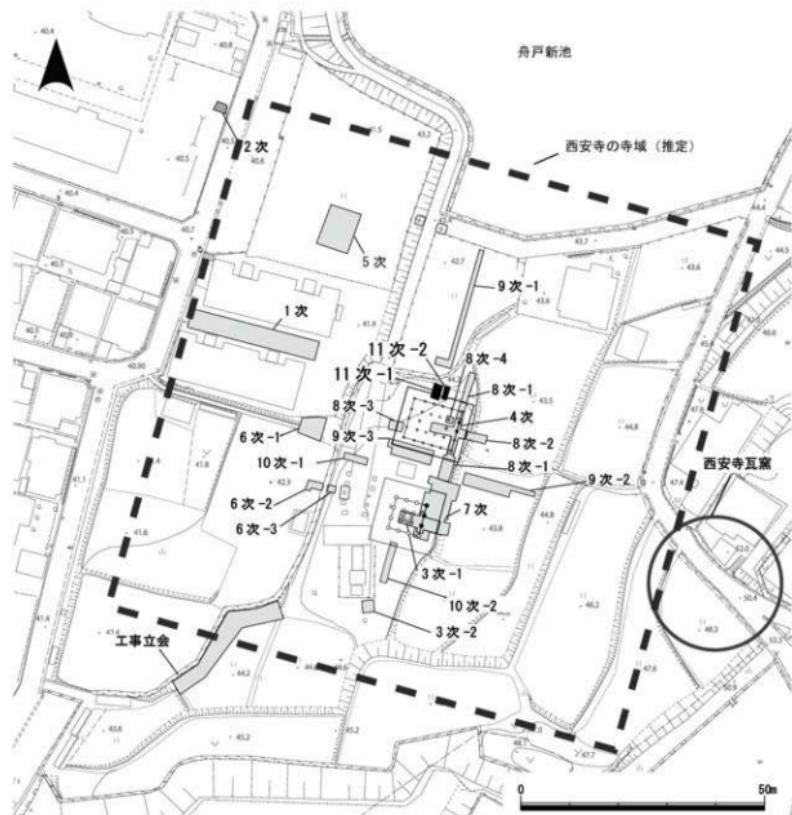


図3 調査位置図 (1/1,000)

## 第2章 調査の内容

### 1 調査の概要

舟戸神社を中心に行ってきました第3～10次の調査で、塔、金堂、回廊等の遺構を確認し、西安寺が四天王寺式伽藍配置を基本とする寺院であったことが明らかとなっている。しかし、中門の遺構は、まだ見つからず、伽藍の向きを特定することができていない。第9次調査で検出した金堂の北方の伽藍中軸線上に等間隔で並ぶ柱穴は、位置からいえば掘立柱で建てられた講堂と考えられるが、金堂の北面で検出した木製燈籠が金堂に献灯されたものであれば中門とも考えられる。金堂の北面に階段が設置されていれば、木製燈籠に対応したものと考えられ、北向きの伽藍配置の可能性が高まることになる。第11次調査は、金堂の北面で階段の有無を確認することを目的に調査を開始した。

調査地は舟戸神社の北端の斜面で、金堂基壇の北面から基壇外周にかけてである。金堂の中央間に当たる伽藍中軸線の西側に東西幅2.0m、南北長3.2mの1トレンチを設定した。掘削を開始してすぐにトレンチ南端で

基壇版築を確認した。斜面に堆積する中近世の堆積土を除去すると乱石積基壇外装は削平を受けており、石積みに用いた石2個を検出した。金堂北面の東端近くを調査した8次調査1トレンチでは石積みが残存していたこともあり、伽藍中軸線の東側の乱石積が検出できる位置に東西幅1.0m、南北長2.8mの2トレンチを設定した。1トレンチの間には約30cmの瓦を残している。しかし、2トレンチも削平を受けており、石積みはまったく残つていなかった。一方、基壇外周でも階段が設置された痕跡は認められなかつたため、石積みの残っていない外装の裏込め部分に断ち割りを行い、基壇外装の構築状況を確認することとした。1トレンチでは西壁に沿って幅約30cm、2トレンチでは東壁に沿って幅約25cmの断ち割りを入れている。

調査期間は令和4年(2022)1月24日から2月22日。掘削はすべて人力で行っている。2月15~17日には、新型コロナウイルス感染症拡大の対策として、地元住民を対象とした現場公開を実施し、3日間で見学者は92名であった。埋め戻しは、金堂北面の検出遺構を砂で覆い保護した上で作業を行い、調査を終了した。

なお、層序、検出遺構等の報告は1、2トレンチが隣接しているため、まとめて行う。

## 2 層序

I層 廃棄土及び表土(近現代の擾乱を含む)。厚さ20~60cmで堆積し、はびこる根の間から多量の瓦が出土している。

II層 近世の堆積土。厚さ約30cmの細粒砂層が堆積し、瓦とともに染付の碗、皿が出土している。

III層 近世の堆積土。厚さ40~60cmの細粒砂、細~中粒砂混じりシルトが堆積する。瓦を多く包含し、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶器が出土し、18世紀の捕鉢を確認した。

IV層 中世の堆積土。1トレンチで厚さ約25cm、2トレンチで厚さ約15cmが堆積する微粒砂から細粒砂混じりのシルトで炭が混じる堆積層である。土師器、須恵器、黒色土器、瓦質土器が出土している。

V層 中世の堆積土。20~25cmで細粒砂混じりシルトが堆積する。瓦、土師器、須恵器、釘が出土。

VI層 約10cmの厚さで堆積する水成堆積層。VII層の外装改修に伴う土坡上から基壇外周に堆積する。基壇側からの流れ込みを示すラミナ(葉理)が確認できる。遺物の出土はない。

VII層 亂石積基壇外装の改修に伴う堆積層で、施工された順に下から記述する。厚さ約30cmの瓦を包含する整地土があり、その上には厚さ約65cm、11層分の版築がある。この版築は外装版築と呼ぶ。版築に使われた土は砂粒を多く含んでいる。瓦、須恵器を含む層があった。版築の掘から外側には土手状の整地が行われており、この整地を土坡と呼ぶ。この土坡上に石積みを施工し、乱石積と外装版築の間には裏込めである微粒砂混じりシルトが堆積する。

VIII層 金堂基壇版築。厚さ約1m、17層分のシルト質の土を用いた版築を確認している。

IX層 地業としての整地土。基壇外周では約10cm、基壇下では約40cmで堆積する。基壇下では複数の堆積層が確認できる。遺物の出土はない。

X層 地山。細粒砂混じりシルト。1トレンチの北端では42.75m、2トレンチの北端では42.79mで検出している。

## 3 検出遺構

基壇 1トレンチの南端の標高44.2mで基壇版築を検出した。これまでの調査から基壇上面は44.4mであり、北面では20cmほどの削平を受けている。本来の金堂基壇の標高から復元すると北面基壇外周からの見かけの基壇の高さは1.6mである。

基壇外装 中世の堆積土下面では、乱石積の裏込め、乱石積の石積み2個、乱石積の掘に施された土坡(土手状の整地)、基壇外周を検出した。

## 2 レンチ

1	2.373/3	緑オリーブ褐色 細粒砂混じりシルト	I層
2	2.373/6	黄褐色	II層
3	10786/6	褐色	III層
4	10786/6	茶褐色、黄褐色	中粒砂混じり細粒砂
5	10786/6	褐色	細粒砂混じりシルト
6	10786/4	にじみ、黄褐色	中粒砂混じり細粒砂
7	10782/4	褐褐色	細粒砂混じりシルト
8	7.373/6	褐色	細粒砂混じりシルト
9	10786/4	にじみ、黄褐色	中粒砂混じり細粒砂
10	10786/6	明黄褐色	中粒砂混じり細粒砂
11	10786/5	黄褐色	細粒砂混じりシルト
12	10786/6	明黄褐色	シルト混じり細粒砂
13	10786/4	にじみ、黄褐色	細粒砂
14	2.376/4	茶褐色	細粒砂
15	10786/6	黄褐色	細粒砂
16	10786/4	にじみ、黄褐色	シルト混じり細粒砂
17	2.373/5	黄褐色	細粒砂混じりシルト
18	2.376/3	にじみ、黄色	細粒砂
19	10786/4	褐色	細粒砂混じりシルト
20	10786/6	黄褐色	細粒砂混じりシルト
21	10786/6	明黄褐色	細粒砂混じりシルト
22	7.376/4	褐色	細粒砂混じりシルト
23	10784/6	褐色	細粒砂混じりシルト

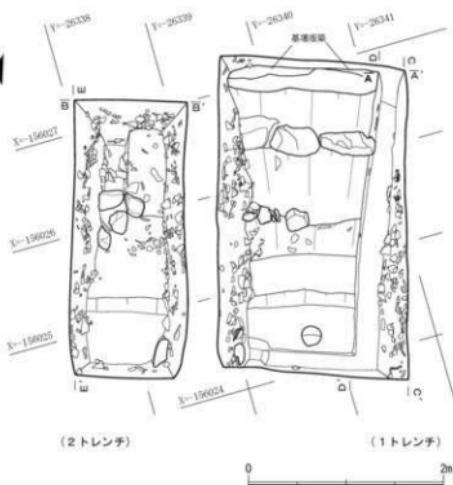
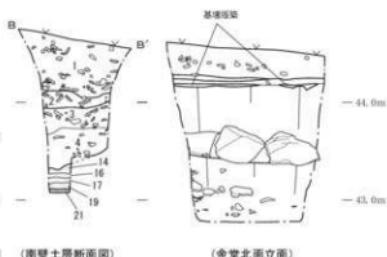
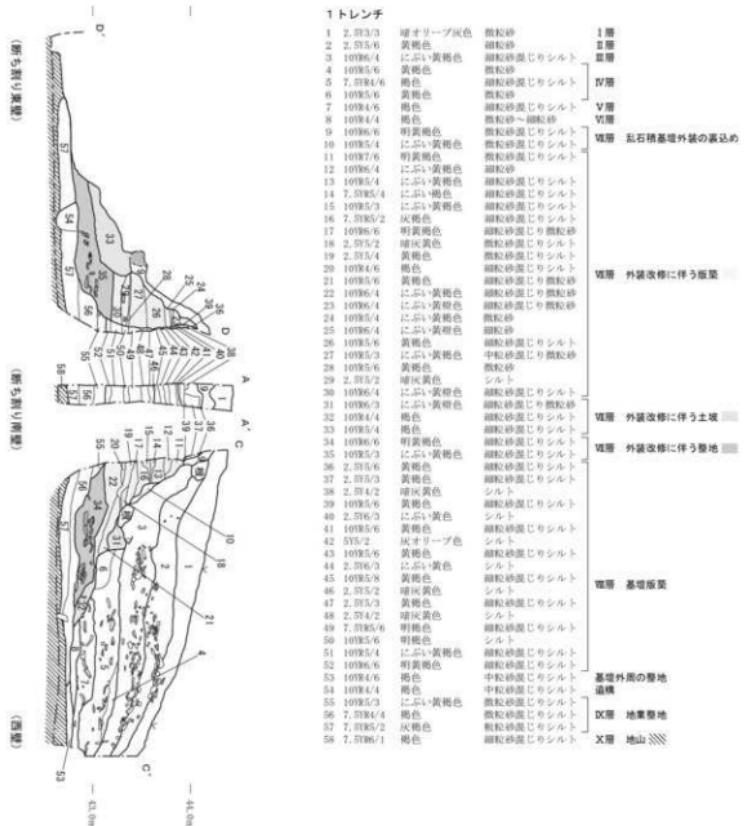


図4 検出遺構平面図・土層断面図 (1/50)

1 レンチの中央で検出した石は高さ 30 ~ 40 cm、幅 50 ~ 60cm の大きさがあり、乱石積の最下段に据えられたものである。これらの石の東側では据付穴の痕跡を検出した。III層掘削中にここに据付穴の北側 70 cm の位置で幅 30cm、長さ 45cm の石が出土しており、元々はこの位置に設置されたものと推定できる。2 レンチの外装部分は削平を受けており、石積みは残っていない。

基壇外装の構築状況を確認する断ち割りでは、1 レンチで基壇版築、外装版築、土坡、瓦を含む整地土を、2 レンチでは外装版築、土坡、瓦を含む整地土を確認した。構築状況のわかる1 レンチの堆積状況を記述する。断ち割りの南壁（基壇側）と東壁では厚さ 1 m、17 層分の基壇版築が確認でき、東壁では石積みから南に約 70 cm の位置でほぼ垂直に切断された基壇版築とその外側に外装版築が築かれていることが確認できる。この外装版築は IX 層上の厚さ約 30 cm の瓦を含む整地土上に築かれており、この整地土には桶巻作りの平瓦が含まれてい



る。外装版築は西壁、東壁でその堆積を確認できる。基壇版築と石積みの間に厚さ65cm、11層分を検出しており、下部の奥行きは1mで上部は基壇側へ傾斜している。外装版築の外側には土坡を築いている。石積みの残る東壁で厚さ30cm、乱石積から約70cmの位置まで土手状の堆積が確認でき、この土坡上に石積みを行っている。土坡には人頭大の花崗岩や凝灰岩、粉状になった凝灰岩、瓦が含まれている。乱石積の裏込めは東壁での残りがよく、外装版築の上面に約10cmの堆積が確認できる。

**基壇外周** 基壇外装の土坡の傾斜は緩やかになり、基壇外周のIX層へと続き平坦面をなす。1トレンチでは土師器片を含む整地土が部分的に堆積している。また、南北20 cm、東西16 cm、深さ8.4 cmの土坑と断ち割りの車輪跡IX層を掘り立てる幅約30 cmの土坑を確認した。

### 3 出土遺物

第11次調査の出土遺物は、総数コンテナ150箱で、そのほとんどがI層の表土、II、III層の近世の堆積土、IV層の中世の堆積土からの出土であった。土器類はコンテナ2箱の出土があり、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器と種類、器種は多岐にわたるが、いずれも小片であった。一方、瓦類は完形に近いもの、新出の資料が出土しており、それらを中心に報告する。

I～III層 1～6はI層およびII層からの出土である。1は単弁16蓮華文軒丸瓦で、直径9.1cmの大きな中房に1+8+16の周環のある蓮子がある。外縁は素文で側面はナデを施す。丸瓦との剥離面には、丸瓦凹面の布目が残る。色調は2.5Y4/1黄灰、焼成は硬質である。2は14世紀の3葉で構成する花文を中心飾りとした貼り付け段頭の均整唐草文軒平瓦の左端部分で、1単位1葉の唐草文が3回反転する。瓦当面の厚さは6.5cm、頭幅は2.5cm。瓦当面には離れ砂が付着している。瓦当裏面、頭は横方向にナデたのち、平瓦との接合部に強めにナデを施す。色調は10YR4/1褐灰、焼成は良好。3、4は鬼瓦である。3はアーチ状の地板に凸線で区画した珠文帯と三角形の眉毛のある破片である。珠文帯の幅は2.3cmで直径0.7cm、高さ1.2cm前後的小ぶりな珠文が1.2cm前後の間隔で並ぶ。珠文の上に凸線の范傷がある。色調は5YR5/8明赤褐、焼成は良好である。南都七大寺式鬼瓦のV式Aの系統を引くものと考えられる。4は表面に木目状の范傷がある鬼瓦である。地板はアーチ状で厚さは3.2cm。外縁はなく、幅3.1～3.6cmの珠文帯を凸線で区画する。眉毛の形状は外側が吊り上がり、上辺は波形となっている。額中央と左側には瘤があり珠文の大きさは直径1.7cm、裏面には縱方向の取っ手が付く。色調は2.5Y3/1黒褐、焼成は軟質。こちらも南都七大寺式の鬼瓦である。5は2辺が残り、その内角が135度であることから八角形の埠と推定できる。表面に文様等は確認できない。厚さ5.1cm、色調は10YR6/6明黄褐、焼成は良好である。6は行基丸瓦である。全長42.4cm、広端幅17.8cm(復元)、厚さ2.4cm。凸面の縱縄タタキ目はおむねナデ消しており、凹面には粗い布目、布筋の綴じ合わせ目、糸切り痕がある。側面はヘラケズリで平坦にし、側面、狭端面、広端面の凹面側に面取りする。色調は10YR5/2灰黄褐、焼成は良好。

III層からは7～21の軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦の出土があった。7は素弁8弁蓮華文軒丸瓦である。直径2.5cmの中房に1+6の蓮子があり、外側の蓮子は中房の端から突出する。中房の周囲には溝めぐり、蓮弁の先端と肩は角張り、先端には珠点を置く。中房周りの溝と外区の溝の中に線状の范傷が複数あり、『法隆寺の至宝』に掲載される法隆寺若草伽藍出土の軒丸瓦6Bと同範である。また、中房にも斜め方向の線状の范傷がある。瓦当裏面には斜め方向の凹凸が残るほどの強めのナデ、丸瓦凸面には縱方向の粗い強めのナデを施す。色調はN5/0灰、焼成は硬質。8は素弁8弁蓮華文軒丸瓦で丸味を帯びた蓮弁の外形を凸線で表現している。外縁は素文で外側に范のあたりの段があり、A型范を用いた軒丸瓦である。瓦当面、瓦当裏面とも摩滅している。目立つ砂粒を含まない密な胎土で、色調は5Y3/1オリーブ黒。9は素弁8弁蓮華文軒丸瓦で丸味を帯びた蓮弁の内側は盛り上がり、中央に鍋が通る。弁端には直径0.5cmの珠点を置く。胎土には0.3cm以下の石英を含み、色調は2.5Y7/2灰黄で、焼成はやや軟質である。10は素弁8弁蓮華文軒丸瓦で丸味を帯びた蓮弁の先端に珠点はないが、蓮弁の先、外区を画す溝内に小珠が2個並ぶことから『法隆寺の至宝』に掲載される軒丸瓦7Abと同範である。瓦当裏面は丸瓦との接合面で剥離しており、その痕跡からは丸瓦先端は未加工であったと判断できる。色調は5Y5/1灰、焼成は硬質である。11、12は単弁11弁蓮華文軒丸瓦。11は珠文のある外縁部分である。12も外縁に珠文を配しているが、摩滅によりはつきりとしない。外縁の外側は幅1.2cmで面取りがあり、その中央部はナデにより凹みがある。瓦当裏面には丸瓦との接合部での剥離があり、瓦当上端から4cm下がった位置に丸瓦凸面を突き合わせ、上部に粘土を付加して接合していることがわかる。胎土には3～5mmの長石、チャートを含み、表面の色調は5Y3/1オリーブ黒、内部は10YR6/4にぶい黄橙の軟質な焼成である。13は単弁16弁蓮華文軒丸瓦で、直径5.5cmの中房に1+4+8の周環のある蓮子を配している。蓮弁の外側には間弁が連続し、間弁の先端は中

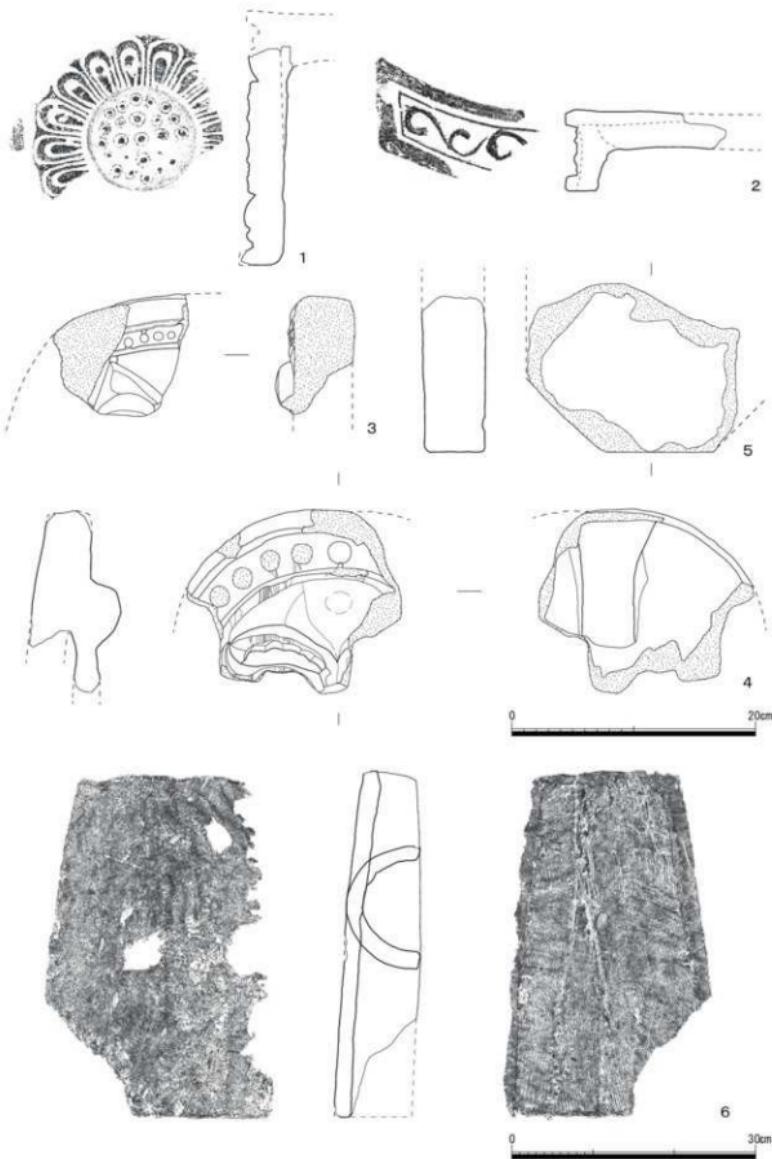


図5 I・II層出土遺物実測図 (1/4・1/6)

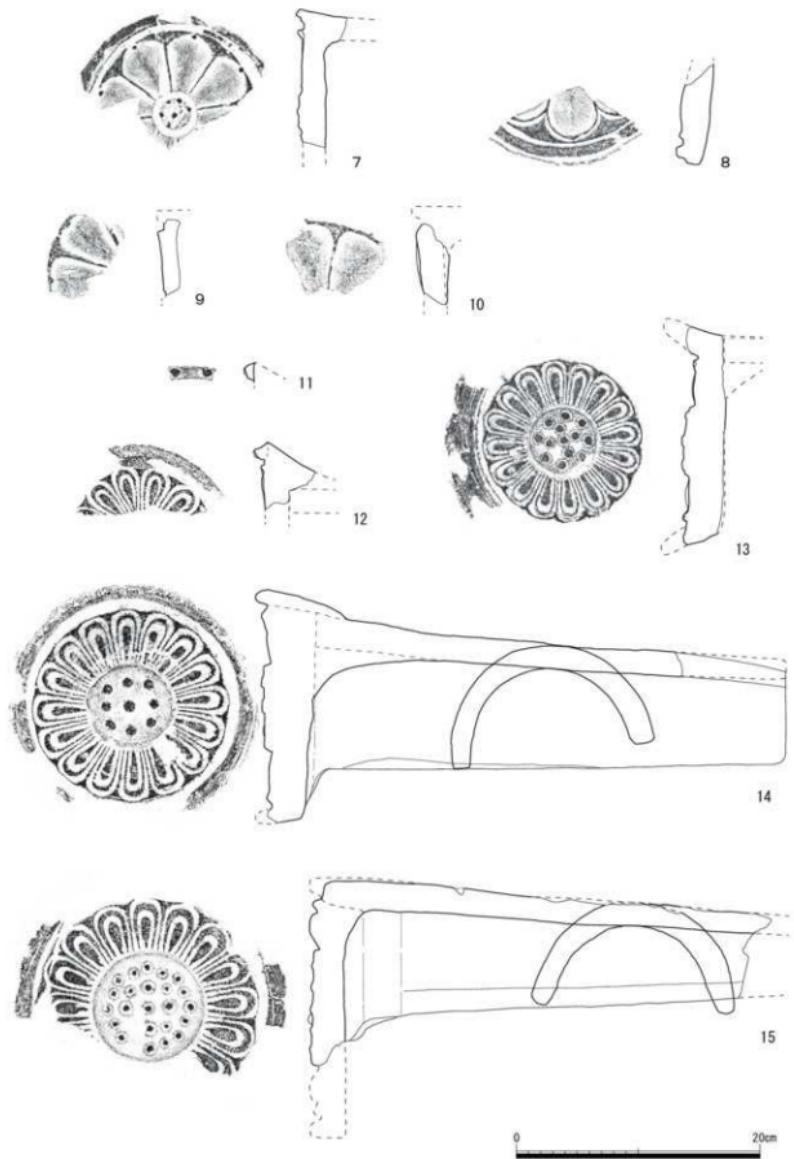


図6 Ⅲ層出土遺物実測図1 (1/4)

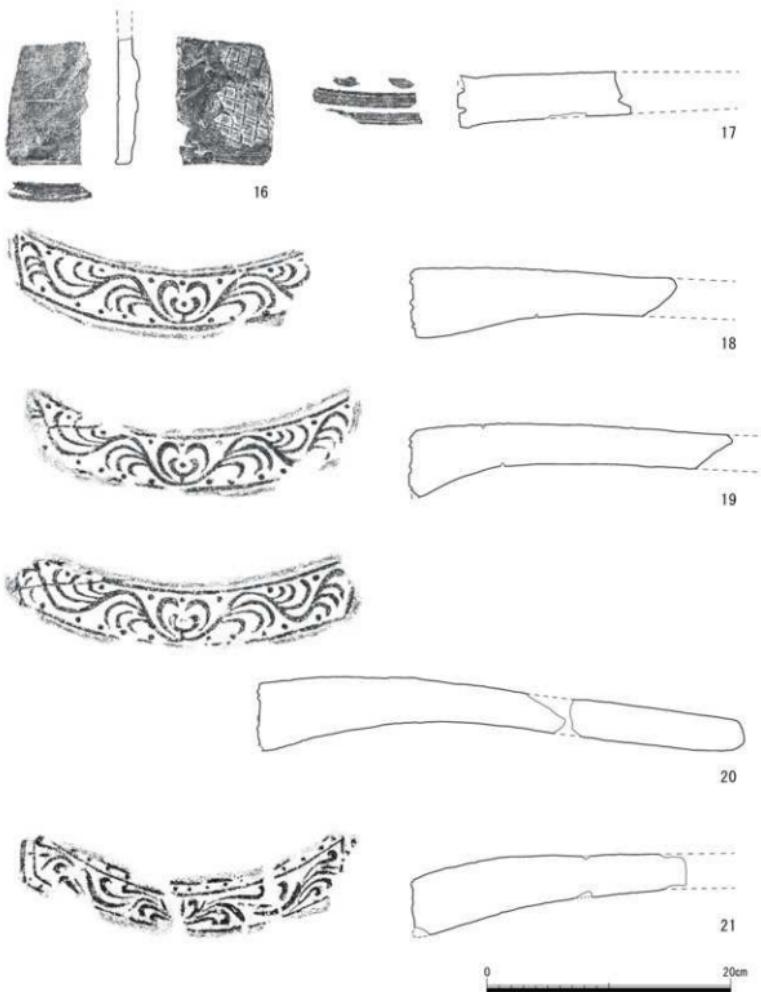
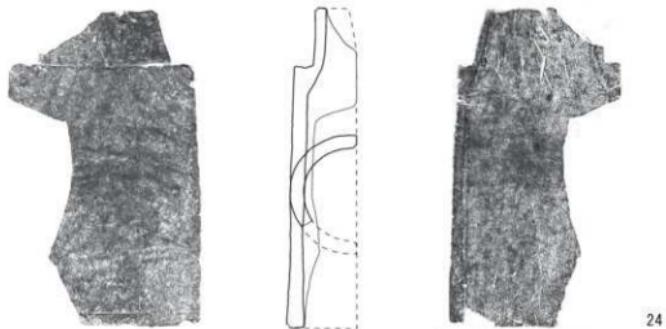
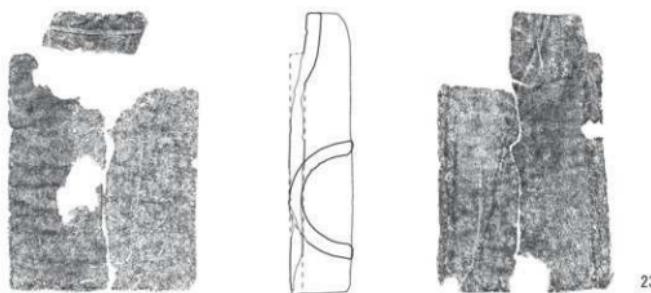
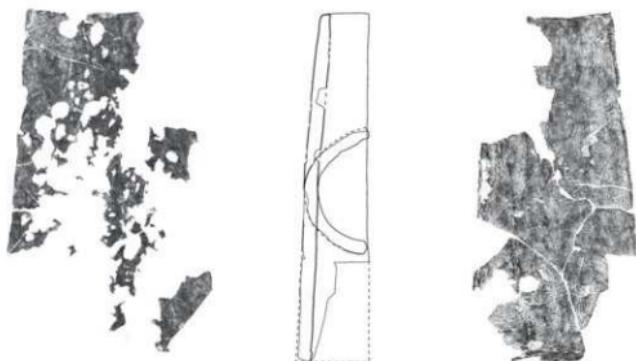


図7 Ⅲ層出土遺物実測図2 (1/4)

房に接着する。内区の蓮弁と外区溝内には細かい范傷がある。外縁は斜線の無文で外縁幅2.0cm、高さ2.2cmあり、同種の軒丸瓦の直径が16.6cm程度であるのに対し、瓦当面の直径は19.2cmに復元できる。色調は2.5Y6/2灰黄で、焼成は良好である。14は単弁16弁蓮華文軒丸瓦で瓦当面の直径は19.5cm、直径7.0cmの中房には1+8の蓮子があり、外側の蓮子は方形に並ぶ。片岡王寺式と称される片岡地域での出土が知られる軒丸瓦である。外縁は素文で側面には横ナデを行っているが、段の痕跡が薄く残りA型范を使用したことがわかる。行基丸瓦を接合し、全長は44.0cm。丸瓦部の凸面は摩滅しているが、瓦当面から約8.0cmの位置に幅7.5cmの工具のあたった痕跡があり、はっきりとした凹みとなっている。凹面には密な布目があり、接合部、瓦当裏面にはナデ、側面にはへ



0 30cm

図8 III層出土遺物実測図3 (1/6)

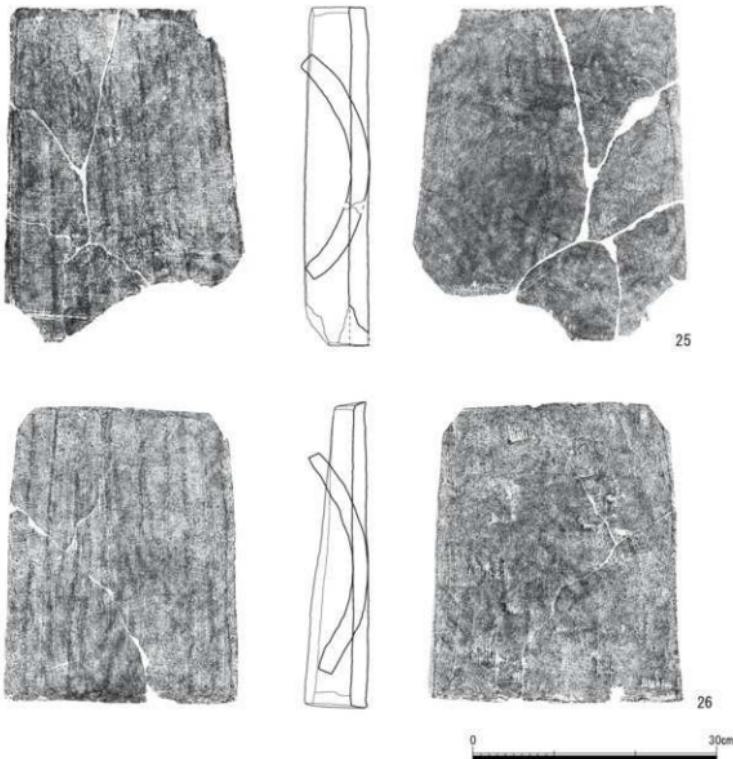
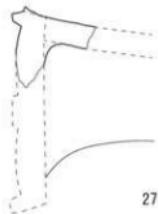


図9 III層出土遺物実測図4 (1/6)

ラケズリをした後に凹凸面側縁に面取りを施す。色調は10YR6/3にぶい黄橙、焼成は良好である。15は単弁16弁蓮華文軒丸瓦で、瓦当面の直径21.1cm(復元)、直径9.4cmの中房に1+8+16の蓮子がある。行基丸瓦を接合しており、丸瓦の先端は凸面側を斜めにケズリ、ナデを行って外縁の付け根に接着させ、粘土を付加している。凹面には布目があり、凹面の接合部から瓦当裏面はナデを施す。色調は5Y7/1灰白、焼成は良好である。

16は平瓦の広端面を丁寧なナデで調整した無文軒平瓦である。瓦当面の厚さは1.3cm、平瓦部の厚さは1.7cm。平瓦の凸面はナデと対角幅1.3×1.0cmの斜格子タキ目があり、瓦当面側から幅1.5cmを横方向にナデする。凹面には布目があり、瓦当面側から幅2.5cmを横方向にナデする。胎土に砂粒をほとんど含まず、色調は2.5Y8/1灰白、焼成は軟質である。17は瓦当面の厚さ4.2cm(復元)、中段の弧線が太い三重弧文軒平瓦である。桶巻作りで型引きの施文を行っており、凸面に幅0.8cm、凹面に幅1.9cmの施文具の痕跡がある。凸面は不定方向のナデ、凹面に右下がりの糸切り痕、密な布目が残る。色調は5Y6/1灰、焼成は硬質である。18～19は一枚作りの均整唐草文軒平瓦で刺又形の中央に珠点を置き、上に巻いた唐草を中心飾りとし、唐草文は3回反転する。凸線による界線で囲まれた内区の上下端には唐草文の合間に珠点を配する。顎形状は顎体差があるが、おおむね曲線顎で、19、20の瓦当面左上部には斜めに走る范傷がある。20は瓦当最大幅29.0cm、厚さ5.5cm、全長40.0



27



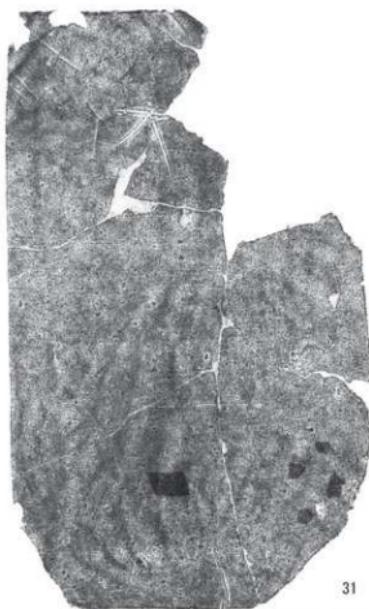
28



29



30



31

ヘンガラセ陶器断片



図 10 IV層出土遺物実測図 (1/4)

cm、狭端幅 26.0 cm である。凹面は粗い布目、凸面は瓦当側から狭端へ向けケズリを施し、狭端側の凸面と側面、狭端面に布目があり、凸型成形台を用いて製作したと考えられる。21 は粘土板一枚作りの均整唐草文軒平瓦で、棒形と上へ巻く唐草文の中心飾りで唐草文は3回反転し、外区には珠文がめぐる。瓦当面の幅は 28.5 cm (復元)、厚さ 5.5 cm で、凹面には細かい布目、幅 3.4 cm の凸型成形台の板材の圧痕がある。凸面は瓦当から狭端へ向けケズリを施す。瓦当から 11.5 cm の位置に幅約 1.5 cm のベンガラとみられる赤色顔料が残存する。

22 は胎土が精密な行基丸瓦である。全長 43.0 cm、広端幅 17.5 cm (復元)、厚さ 1.6 cm。凸面は丁寧な横ナデで、狭端に指頭圧痕が 2か所ある。凹面には密な布目、布筒の綴じ合わせ目、布筒端の痕があり、布目は部分的に木目状の痕があるて具の圧痕で潰れている。側面はヘラケズリするが、分割破面が段をなして残る。側面の凹面側に面取りする。色調は 5Y8/1 灰白。23、24 は玉縁丸瓦で、23 の玉縁には幅 0.5 cm の水切り溝がある。全長 34.5 cm、広端幅 14.6 cm、玉縁長 4.9 cm、厚さ 1.7 cm。凸面は縦繩タタキ目を工具を用いて横にナデ消す。肩部は大きく剥離しており、玉縁、丸瓦部の成形とは別に粘土を付け足し成形したことがわかる。凹面には糸切り痕、玉縁から丸瓦部まで一体の布目、布筒の綴じ合わせ目がある。側面はヘラケズリし、凹面側に面取りする。色調は 2.5Y7/2 灰黄。24 の凸面は摩滅しており、広端に横ナデの擦痕がある。全長 39.4 cm、広端幅 13.0 cm (復元)、玉縁長 7.0 cm、厚さ 1.8 cm。凹面には玉縁から丸瓦部まで一体の布目、糸切り痕がある。側面の凹面側に面取りする。色調は 2.5Y5/1 黄灰。25 は桶巻作り平瓦である。全長 41.5 cm、広端幅 30.6 cm (復元)、狭端幅 26.0 cm (復元)、厚さ 2.2 cm。凸面は縦繩タタキ目をナデしており、凹面には側板痕跡、布目がある。左側面際には分割界線があり、分割凸帯の撚紐の圧痕が認められる。側面は平坦にヘラケズリし、側面、狭端面の凹面側に面取りをする。表面は黒く覆われており、内部の色調は 5YR6/6 橙。26 は狭端角を切断した桶巻作り平瓦である。全長 36.5 cm、広端幅 27.5 cm、狭端幅 25.5 cm、厚さ 1.7 cm。凸面は一度縦タタキ目を施した後横ナデし、さらに形を補正するためにタタキ板の角を当てて調整している。凹面は側板痕跡、布目があり、側面は平坦にヘラケズリする。側面、狭端面、広端面の凹面側、側面の凸面側に面取りする。色調は 2.5Y5/1 黄灰で焼成は良好である。

IV 層 27 は素弁蓮華文軒丸瓦、28～31 は無文軒平瓦で中世の堆積土からの出土である。27 は素弁蓮華文軒丸瓦で蓮弁と外縁部分の出土である。これまでの出土例から、瓦当面の直径は 17.4 cm 前後、直径約 3.0 cm の中房に 1+5 の蓮子があり、蓮弁は不均等な配置となる軒丸瓦で、木目状の范傷が多い。外縁の側縁には范端の段があり、A 型范を使用している。砂粒の少ない密な胎土で、色調は 5Y7/1 灰白、焼成はやや軟質である。

28 の凹面は布目と所々に指頭圧痕があり、凸面は繩タタキ目をナデ消している。瓦当面の厚さは 1.6 cm で横ナデを施し、瓦当側凹面には幅 1.6 cm の横ナデ、凸面には幅 0.9 cm の面取りをする。色調は 7.5GY5/1 緑灰、焼成は硬質。29 は瓦当面の厚さ 1.2 cm。凹面には布目、瓦当側に布筒端の圧痕があり、瓦当面から幅 1.8 cm の位置まで横ナデを施す。凸面はナデ調整で瓦当面から幅 1.5 cm の位置まで同時にナデする。色調は 5Y8/1 灰白、焼成は軟質である。30 の凹面には布目と布筒端の圧痕があり、凸面は横方向のナデである。瓦当面は凹凸両面のナデにより、厚さ 1.0 cm となっている。とくに凸面からのナデは幅 3.1 cm と幅広く、傾斜がつくほどの強いナデである。胎土に砂粒をほとんど含まず、色調は 5Y7/1 灰白、焼成は軟質である。31 は瓦当面の幅 29.4 cm、狭端幅 24.2 cm に復元でき、全長 50.0 cm、厚さ 1.5 cm と全体の形状、法量がわかる資料である。厚さ 1.5 cm の瓦当面と瓦当側の凹面は幅 2.2 cm の横ナデで瓦当面を整えている。凹面には右上がりの糸切り痕、布目、幅 9.0 cm の側板痕跡、左側面近くには布筒の綴じ合わせ目、瓦当面から 2.5 cm の位置に布筒の端の痕跡がある。また、右側面近くには分割界線があり、界線の中には分割凸帯の撚紐の圧痕がみてとれる。凸面全体は丁寧な横ナデを施し、狭端側にはヘラ書きの「大」の字を刻んでいる。瓦当面から 12.0 cm の位置には幅 3.7 cm のベンガラとみられる赤色顔料が残っている。色調は 2.5Y5/1 灰、焼成は硬質である。これらの無文軒平瓦は第 11 次調査で初めて確認したものであり、胎土、焼成が素弁蓮華文軒丸瓦と共通するものがあり、素弁蓮華文軒丸瓦と組み合せて使用したと考えられる。

### 第3章　まとめ

**金堂基壇外装の改修**　今回調査を行った金堂北面では、基壇外装は削平を受け、外装の石積みも2個が残るのみで、乱石積基壇外装に階段が設置された痕跡は確認できなかった。しかし、石積みのない部分で行った断ち割りによって乱石積基壇外装が改修によって築かれたものであることが明らかとなった。

乱石積基壇外装の改修が明らかになったことで、これまでの調査で検出した遺構も理解できるようになった。金堂の北面を調査した第8次調査1トレンチの乱石積の裏込めとした版築の堆積は、外装版築であり、乱石積の下に堆積する多量の瓦を含む堆積土は、外装版築下の瓦を含む整地土である。第8次、第9次調査でそれぞれ検出した金堂の北、東、南面の乱石積の下の整地土は、今回土坡と名付けたものと同じものである。第8次調査3トレンチでは金堂の西面が削平を受けた状況であったが、基壇版築が垂直に切断された状態であり、改修時の外装版築部分が削平されたものと考えられる。

乱石積基壇外装の下に構築された土坡は、検出した三面で奥行と高さに違いがある。これは、西安寺の南から北、東から西に低くなる地山面の高低差を解消させ、乱石積基壇の基底を均一にするためのものである。金堂の基壇外装は下部を土坡、上部を乱石積で築いた二段構造であったと考えられる。また、第8次調査で北、南面の土坡からは7世紀前半の秦弁蓮華文軒丸瓦が出土し、土坡内には人頭大、粉状になった凝灰岩が含まれ。金堂南

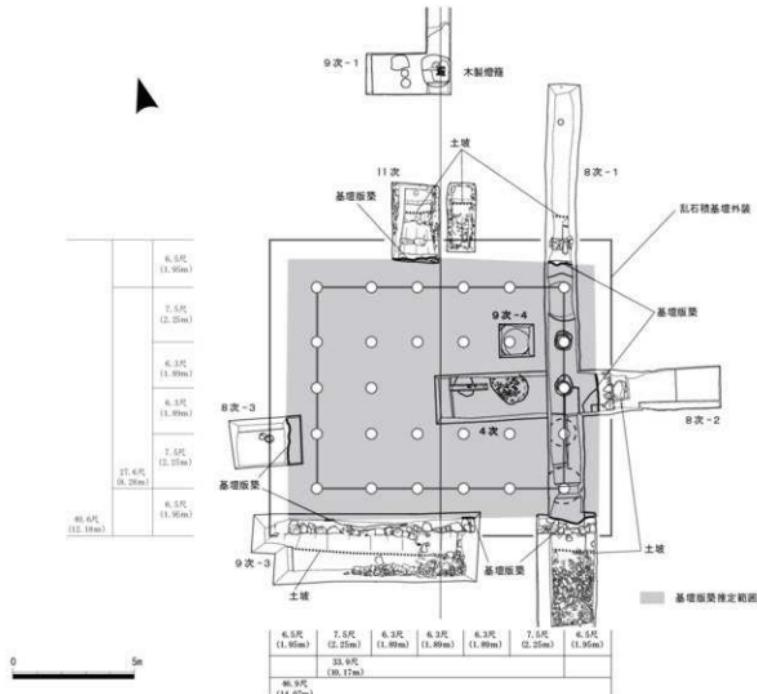


図11 金堂検出遺構平面図 (1/200)

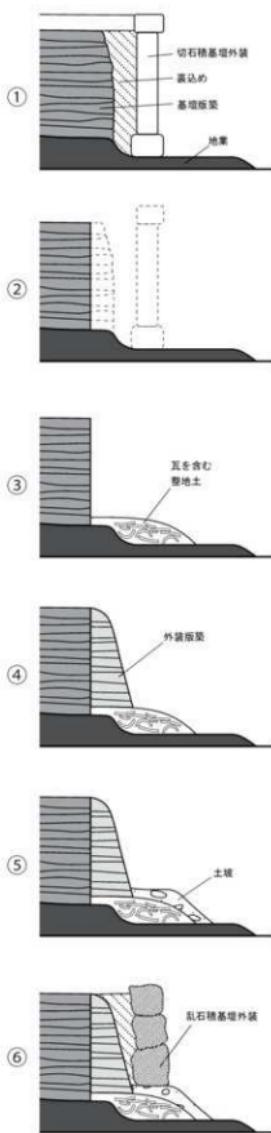


図 12 基壇外装の改修過程模式図

面基壇外装に凝灰岩を使用すること、全調査を通じて凝灰岩の出土があることから、金堂の建立時期は7世紀前半で、凝灰岩製の切石積基壇外装であったと推定できる。外装の改修時期については、時期を示す遺物の出土がないため特定できないが、金堂南面での瓦の出土状況から、金堂に行われた最後の修理である10世紀、平安中期と推測する。

第11次調査の断ち割りの土層断面の観察により、図12に示す乱石積基壇外装の改修過程を復元した。

① 金堂の建立時の切石積基壇外装（推定）

地山上に地業の整地を行い、基壇版築を構築、凝灰岩製の切石積み基壇外装を設置

② 基壇外装の取り外しと基壇版築の切断

基壇外装の内側70cmの位置ではほぼ垂直に切断している。

③ 瓦を含む整地

基壇版築の外側、盛土地業の上に瓦を含む厚さ30cmの整地を行う。

④ 外装版築の構築

瓦を含む整地土上に版築を築く。現状で外装版築の下部は奥行1mあるが、上部は基壇側へ傾斜する。最初から斜めに築いたのか、真直ぐに築き調整したのかは不明。

⑤ 土坡の構築

外装版築の外側、瓦を含む整地土を覆うように土手を築く。

⑥ 積石、裏込めの施工

土坡上に石積みを行い、裏込めを入れる。現状は外装版築上に厚さ10cmの裏込めが残存。

範囲確認調査の区切り

平成26年度から行ってきた第3、4次、第6～11次の範囲確認調査では、長年実態のわからなかかった西安寺跡の遺構を確認し、四天王寺式伽藍配置を基本とする寺院であること、舟戸神社周辺にも遺構が広がることが明らかとなり、一定の成果を得ることができた。主要伽藍の遺構は境内地にあり、このまま保存することが可能なため境内での範囲確認調査を終えることとした。しかし、西安寺の伽藍の向きや寺域など明らかとなっていない点も残っている。今後は舟戸神社周辺に調査の範囲を広げ、継続した調査を行っていきたい。

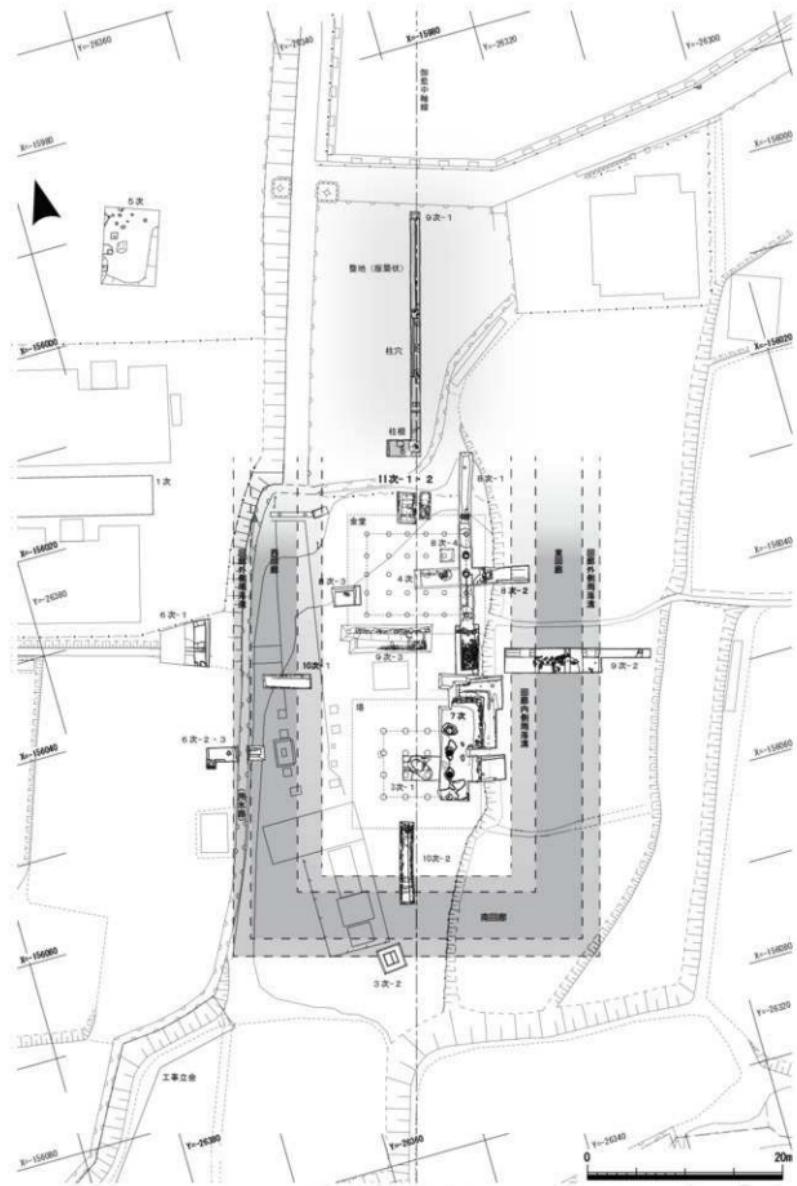


図 13 伽藍想定図 (1/500)



調査前（北東から）



調査地遠景（北から）



金堂北面遺構検出状況  
(北から)



1 トレンチ  
金堂基壇北面（北から）



1 トレンチ  
東壁土層断面（西から）



1 トレンチ  
西壁土層断面  
(北東から)



1 レンチ 西壁  
基壇外周土層断面  
(北東から)



2 レンチ 南東隅  
外装版築土層断面  
(北西から)



2 レンチ  
土坡検出状況  
(南西から)



1 トレンチ 断ち割り 南東角土層断面  
(北東から)



1 トレンチ 断ち割り 南西角土層断面  
(北西から)

1 トレンチ 断ち割り 外装版築下の瓦を含む整地土  
(北から)









16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



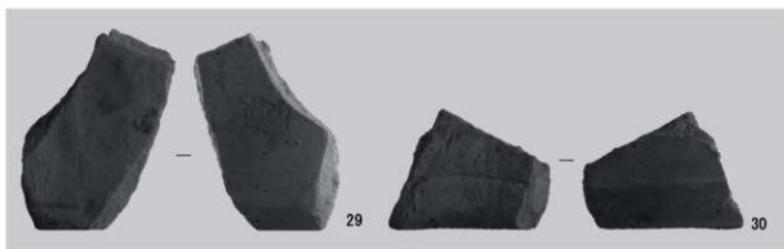
26



27



28



## 報告書抄録

ふりがな	さいあんじあとだい11じはつくつちょうさほうこくしょ								
書名	西安寺跡第11次発掘調査報告書								
シリーズ名	王寺町文化財調査報告書								
シリーズ番号	第18集								
編著者名	櫻井恵・福井彰乃								
編集機関	王寺町								
所在地	〒636-0002 奈良県北葛城郡王寺町王寺2丁目1番3号								
発行年月日	令和5(西暦2023)年3月29日								
調査地名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 番号	道路 番号	29425	1081	34° 35' 35"					
調査地名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
西安寺跡 (第11次)	寺院	古代～中世	金堂基壇、乱石積基壇外装	軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、磚、燒土、土師器、須恵器、瓦質土器	金堂北面の乱石積基壇外装の石積みを検出。外装は削平を受けほとんど残っていなかったが、基壇版築の外側に新しい版築を造成し、土壇を積み上げた。乱石積基壇を構築していることが判明した。改修前の基壇外装は凝灰岩製の切石積基壇外装と推定できる。				

西安寺跡第11次発掘調査報告書

王寺町文化財調査報告書 第18集

2023年3月29日

編集 王寺町  
発行 奈良県北葛城郡王寺町王寺2丁目1番23号

印刷 株式会社 明新社  
奈良市南京終町3丁目464番地